奥信濃文化

第40号　別刷

◆目　次◆

愛宕神社例大祭ものがたり ……村松　和夫…… 1
●『市河文書』元中十四年書状の謎と飯山市静間の城郭群……松澤　芳宏…… 6
本間美術館所蔵市河文書 元中十四年文書をめぐる研究史概略……宮澤　崇士…… 19
飯山の藤村と「破戒」にもっと光を……藤木　義博…… 26
ふるさと館友の会『市内お祭りアンケート調査』について…… 29
ミニ企画展「飯山の相撲」を振り返る……宮澤　崇士…… 53
ふるさと館のお仕事……藪原多賀子…… 58
令和４年度ふるさと館事業報告…… 60
あとがき

2023年3月

飯山市ふるさと館友の会

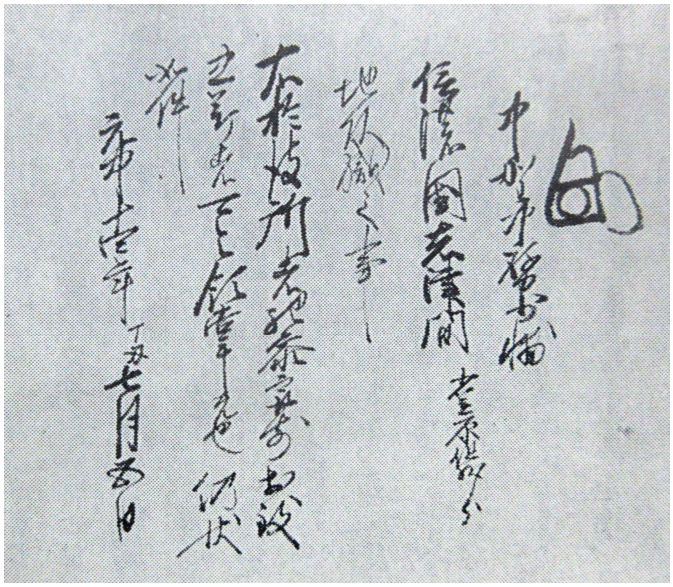
『市河文書』元中十四年書状の謎と飯山市静間の城郭群

松澤芳宏

１、元中十四年書状をめぐる歴史的背景

重要文化財『市河文書』に、中野中務少輔宛で元中十四年の年号があり南朝某とされる花押のある袖判書状がある（第１図）。

この書状の発給主については先学の研究により、南朝年号を用いていることから南朝某とする見解に準じていたが、関東圏で早くから、その中でも新田氏某とする見解が在ったらしい。さらに、最近、江田郁夫氏が新田武蔵守某とする見解に行き着いた。



第１図　新田武蔵守某軍勢催促状

『市河文書』本間美術館蔵　出典：「飯山市誌」

それは山梨県立博物館が所蔵する『市河家文書』に、中野中務少輔宛と推定の、密書と思われる書状に、武蔵守の署名と花押があったからである。

8 月 10 日付のこの書状は年号未詳ではあるが、内容から第 1 図の元中 14 年書状と関連あるもので、同年前後の年号が推察されている（注 1）。

仰天、その書状の花押は、まさしく第 1 図の花押と一致するものであった。そこに気づかなかった筆者の無知は恥ずべきことであったが、ようやくその意味する事の重大性に気が付いた次第である。

この文書の詳細な内容と関連ある元中年号文書群については当地の飯山市ふるさと館学芸員の紹介が当号にあるので、そちらを参考にされたい（注２）。

この文書の問題点は、既に南北朝合一が１３９２年に成立し、元中 14 年は応永４年（１３９７）であることにある。両朝合一後でも、南朝方の不満が温存され、南朝元中年号の軍勢催促状や安堵状を乱発し、信濃や関東に暗躍する旧南朝勢力があったのである。

南朝某の元中１４年（応永４年）中野氏宛の書状の花押①と、元中１８年（応永８年）書状②・元中丙午（応永３３年）書状③の**源朝臣**の発給名がある花押②・③がやや一致し、源朝臣の署名から、一連の元中年号を有する書状の発給主は、関東の源氏系の名族で**南朝方の新田氏某**であることは推察されていた（注３）。

但し、①と②・③は細部が異なっていたが、新たに注目された密書と推定の武蔵守書状の花押④と①は全く同一であり、①の**第１図の書状も武蔵守某**であると推定された。また、①～④とも共通点があり、同一家系の新田氏であることは間違いなく、同一人である可能性は否定されている。つまり、江田氏は当時の状況から①と④を新田義貞の嫡孫（義宗の嫡子）**新田武蔵守某**とし実名は貞方と推定し、②と③は武蔵守の一族**新田相模守義則**とみている。新田義則は新田義貞の子である義宗の子、つまり義貞の嫡孫とされる人物ともする意見もある（注４）。③が応永 33 年であると、義

則の死亡年代以降となり、江田氏は丙午が誤記としたが、現在の歴史観で年号の間違いを求めることは賛成できない。②・③の書状発給主は義則の従兄弟**義陸**とする見方もある（**注４に同じ**）。

問題は**武蔵守**で、本来は新田義宗であるが、根本史料にはないが、正平 23 年/応安元年（1368 年）に死亡したとされるので（江戸期成立の「喜連川判鑑」）、年次が合わない。そのこと故からか、官途からしても、武蔵守は**義則の子息か兄弟とみられる**と久保田順一氏が述べている（**注４に同じ**）。

なお、『市河文書』の中野氏宛の書状の内容は次のようなものである（訓読）。

（花押）

中野中務少輔（なかつかさのしょう）

信濃國志津間小笠原但州分

地頭職（じとうしき）之事

右かの所に於いては，最前に馳せ参じ、忠節を致すに於いては、領掌せしむべきものなり、依って状件（くだん）のごとし

元中（げんちゅう）十四年丁丑（ひのとうし）七月五日

この書状は袖判という型式の所領宛行状で、当書状に限っては一種の契約状である。関東圏では**軍勢催促状**とされており、今後はその名称を使って行きたい。

袖判は、書状の右端に花押を書くもので、差出人が配下のものに代筆させた場合、承認のために花押を書いたもので、身分の高い人が出す書式であるとされる。

上記文中、「**最前に馳せ参じ、忠節を致すに於いては、領掌せしむべきものなり**」は解釈が難しい。既に味方に参陣したとみる意見もあろうが、いち早く参陣した場合は旧北朝方の小笠原但州分の志津間の地頭職を与えようという軍勢催促状であるという先学の見解もある。

第２図　田草城本郭を北方より望む。昭和３０年代後半の撮影。

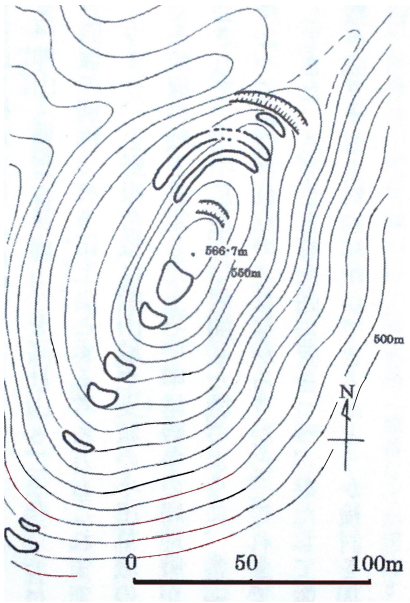
私はここでは後者の意見に賛同する。つまり、最前に馳せ参じ云々は、具体的な戦功表現がなく、それだけで過分な恩賞を与えたとする前者にはかなりの矛盾がある。後者は速やかに軍勢を集めようとする状況下で、恩賞をもちらつかせたわけであり、やはり、この書状は後者の契約状とか軍勢催促状というにふさわしい内容である。

ここで、問題となるのは信濃国志津間（飯山市静間）の地頭職（じとうしき）を関東圏出身の新田武蔵守某が中野中務少輔に与えようとする動きにある。普通は守護・地頭の任命権は幕府にあり、

信濃国の地頭職は信濃守護たる人物が形式上任命するのが常である。

いくら、形骸化した地頭職であっても、関東圏出身の新田武蔵守某が信濃国の地頭職を云々するのは異常である。それについては、室町幕府の足利義満体制転覆がなったときこそ可能であると思えてならない。なお、実質的には**若槻新庄静妻郷内の地を奪取していたのかどうか課題が残る。**

また、武蔵守ではない新田氏某は、応永年代に現在の茨城県や栃木県内の関係氏人に書状を発給しており、北信を含めると、新田義貞嫡系の一族は、細々ながら広大な範囲に影響を及ぼしていた。歴史上では詳細がつかめない旧南朝の氏人が、当時、幕府転覆を夢見ていたのであろうか、気になるところである。



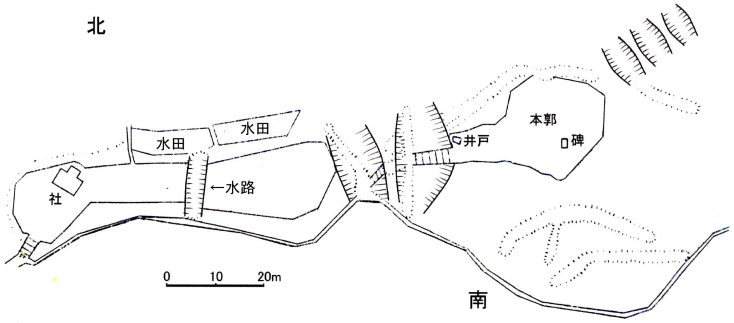
第３図　とんば城略図

さて、応永４年の軍勢催促状の２年後、応永６年10月には、和泉国堺（大阪府堺市）で強大化した守護大名の大内義弘の乱が起こるが、この乱には**鎌倉公方の足利満兼も同調し**、西日本では楠木･菊池氏など旧南朝方の参陣が知られている。しかも、３か月前の応永６年７月25日、満兼は義弘に御教書を発している**（注５）**。

ついで、応永６年11月15日、市河頼房は新守護小笠原長秀の手に属し、大内の乱平定に出陣する。途中、美濃国釜戸（岐阜県瑞波市）で、義弘の与党土岐詮直に行く手を阻まれて帰国し、北陸筋より進軍しようとした。しかし、12月21日堺城が陥落し、大内義弘が討ち死にしたので、出かける必要がなくなった。

その時、郷里付近で、反乱を起こす者があり、高井郡烏帽子形城（現栄村堺かその周辺）で軍功を挙げた。烏帽子形城に立てこもったのは中野中務少輔の可能性を飯山市誌で述べ、さらに新田氏一族の関与をも疑ったが**（注６）**、ここに来て、さらに補強された。但し、**反乱主は大井田氏など越後新田氏一族**とし、志久見館（内池館跡）を壊滅し、市河氏箕作館移住の原因となったとする説は石澤三郎氏が既に述べている**（注７）**。

大内義弘は、鎌倉公方足利満兼（氏満の子）の御教書を奉じて反乱を企てたのであり、謎解きを行うと、足利満兼・大内義弘・新田武蔵守某・大井田氏等新田一族・中野中務少輔が表面上、一時的に､味方同士のような関係になり、志久見郷中心域に攻め込んだのは中野中務少輔と隣地（津南町から十日町市）の新田氏一族の連合軍の可能性が増したのである。中野中務少輔宛書状２通が、のちに、市河氏にわたっていることは､それらの書状は、やはり、市河氏の烏帽子形城攻撃に関連がある戦利品と見たい。



第４図　飯山市大字飯山（江戸後期には静間村内）の後谷城（奈良沢城）略図。出典：『飯山町誌』を改変。

ちなみに、越後新田氏一族と中野中務少輔の結着の根拠は、先記した

2年前の①の中野氏宛の発給主が新田武蔵守某であることで理解できよう。武蔵守某は大井田氏等の新田一族に指令を出しうる人物であろう。ちなみに、新田武蔵守某は④の書状に中野中務少輔の近くにいる状勢がくみ取れるので、信濃潜伏とみる意見が多いが、江田郁夫氏は北信濃に隣接する越後の国境地帯を重視している（**注１に同じ**）。それならば、新田武蔵守は大井田氏等の保護を受けて潜伏していたことになり、**大井田氏の宿敵市河氏の討伐計画に参画していた可能性が高い。**

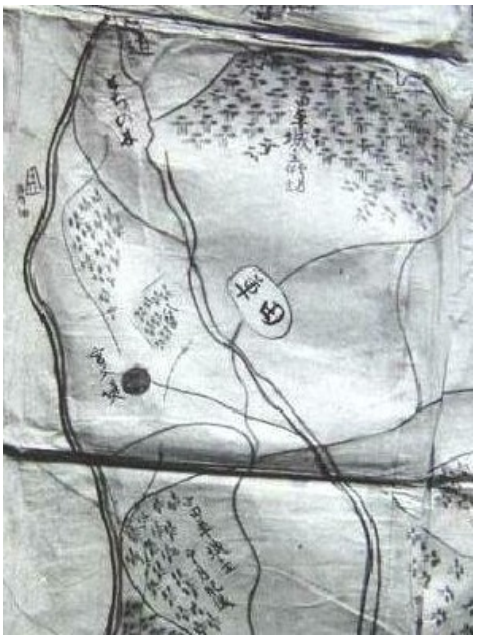
先の**中野中務少輔宛袖判書状が発給された年次では大内義弘の乱に結び付く因子は解明されておらず**、若槻新庄静妻郷の小笠原氏や志久見郷の市河氏討伐の計画が、武蔵守某から中野中務少輔参陣に向けられていたのではなかろうか。それが、④の書状にみられるように、中野中務少輔のためらいで実現せず、2年後、結果的に、大内の乱に呼応する形になったのではあるまいか？。宿敵鎌倉府自体に応援したのではなく、市河軍留守中を狙って、好機とみて反乱を起こしたと推量したい。

さて、畿内以東で、鎌倉府とともに大内の乱に呼応したのは京極秀満・土岐詮直・新田武蔵守某・越後新田氏一族・中野中務少輔と推定したいが、その他にもあるらしい。

今川了俊が応永２年駿河守護に移され，同７年には鎌倉公方足利氏満と大内義弘の仲介を疑われ、足利義満に追討されたが許され、引退後は文筆に専念したとされるのは（**注８**）、氏満死去（応永５年）直前に大内の乱（応永６年）へ呼応する画策が鎌倉府でも進んでいたことを示す。了俊も大内与党であろう。

なお、大内義弘の乱にかかわった足利満兼は応永５年11月、父氏満から鎌倉公方に代替わりした直後の事件であったが、前公方の時から、室町幕府と対立関係に進みつあることが読み取れる（**注８に同じ**）。

書き遅れたが、大内義弘の乱の時、鎌倉公方は進軍途中で、情勢を察し、進軍をやめたという。以後、満兼は幕府に対して恭順の意を表している。再び幕府体制に組み込まれた鎌倉府の状況から、以降、南朝勢力の弱体化も進む。



第５図　江戸後期の静間村絵図（部分）

飯山市静間坪根秀一氏蔵。元禄８年～明和６年の間の作成。望月伊豆･望月肥後の名が見える。

中野氏は幕府方についたものと、大内方についたものとに分かれたようであるが、大内の乱後、中野氏に関する史料が稀となり、本拠中野郷（中野市）も年々高梨氏に蚕食されてゆく。

なお、宗良親王によって正平20年（1365）に**越後国頚城郡富川保（上越市上富川）**を恩賞として与えられた**中野左馬助**なるものが知られているが、後の中野中務少輔と、どのような関連性があるのか、同じ南朝方であるだけに、注意を払う必要がある。

なお、これまで述べてきた烏帽子形城は石澤三郎氏によると、大次郎山（栄村）の北西、木島郷と志久見郷への古道沿いの土地、烏帽子型の地名の所としている（**注７に同じ**）。鎌倉末期から南北朝初期に中野氏の所領の一部が、湯山庄（野沢温泉村）にあることは、烏帽子型地点に近く、烏帽子形城の中野氏の関与を肯定させる。

その他、新潟県津南町烏帽子形山とする説（*注９*）もあるが、信濃の高井郡ではない。その他、

志久見郷に近く津南町上郷宮野原に信越国境の烏帽子いう集落があり、その地名の由来を知る由もないが、このあたりの長峰は南北朝期前半にも張陣された場所であり、城郭としても利用される可能性がある。なお、南北朝前後の時期の山城では小菅要害（飯山市）など、具体的な城郭遺構を残さない天険の要害地形を利用する場合があり、烏帽子型地点が城郭遺構を残さなくても、その地名の存在は重い。

２、飯山市大字静間をめぐる城郭群

第６図　静間区蔵・元禄８年静間村絵図（部分）に主要な古跡を印字

前項で、応永４年から応永６年前後の地域的な歴史的背景について記述してきたが、理解を深めるために、飯山市静間地域の城郭群について次に記す。

第７図　田草区の寺屋敷地籍にあった五輪塔（現在は大久保区勘介山々麓の墓地に移転）。左の火輪の鎌倉時代後期～南北朝時代）は飯山市内最古の様式で、田草城の古さを物語るかもしれない。

飯山市大字静間には、平地に静間館・北畑館の二つの館があり（注 10)、清川谷に飯山市大字飯山に接するか、また境界線に近く、とんば城（とんび城・上倉城）・後谷（うしろだに）城（奈良沢城）・坪根城の各山城がある。清川谷南側の支谷の宝蔵谷と田草川谷にまたがった尾根に田草城があり、田草川谷の谷口に小田草城がある。

とんば城（第３図）は飯山市大字静間字鳶ケ沢にあり、大字飯山との境界に位置する。江戸時代後半に上倉城とされてきたのは戦国期後半の上倉氏の山城だという認識があったからであり、城郭は鳶ケ沢の地名から、古代に飛火すなわち、烽火台としての機能があったと推察されており、上倉氏以前からの使用が疑われよう（注 11)。

構造的にも戦国期に築城されたという様式ではなく、簡単な削平地とわずかな空堀を伴うだけの構造であり、南北朝期前後にも機能できる山城である。ちなみに、飯山市上倉・奈良沢も若槻新庄静妻郷の内である。

第８図　田草城北方の長大な空堀
宝蔵谷・清川谷方面に向けた塹壕のようなものか？。

また、後谷城（第４図）は寛政 10 年（１７９８）以降の静間村絵図に後谷城としての記述があり（注 12)、静間村の範囲内であったが、現在は飯山市大字飯山の内となっている。境界の変動は江戸末期に後谷城は奈良沢城であるという認識が深まったことにあろう。

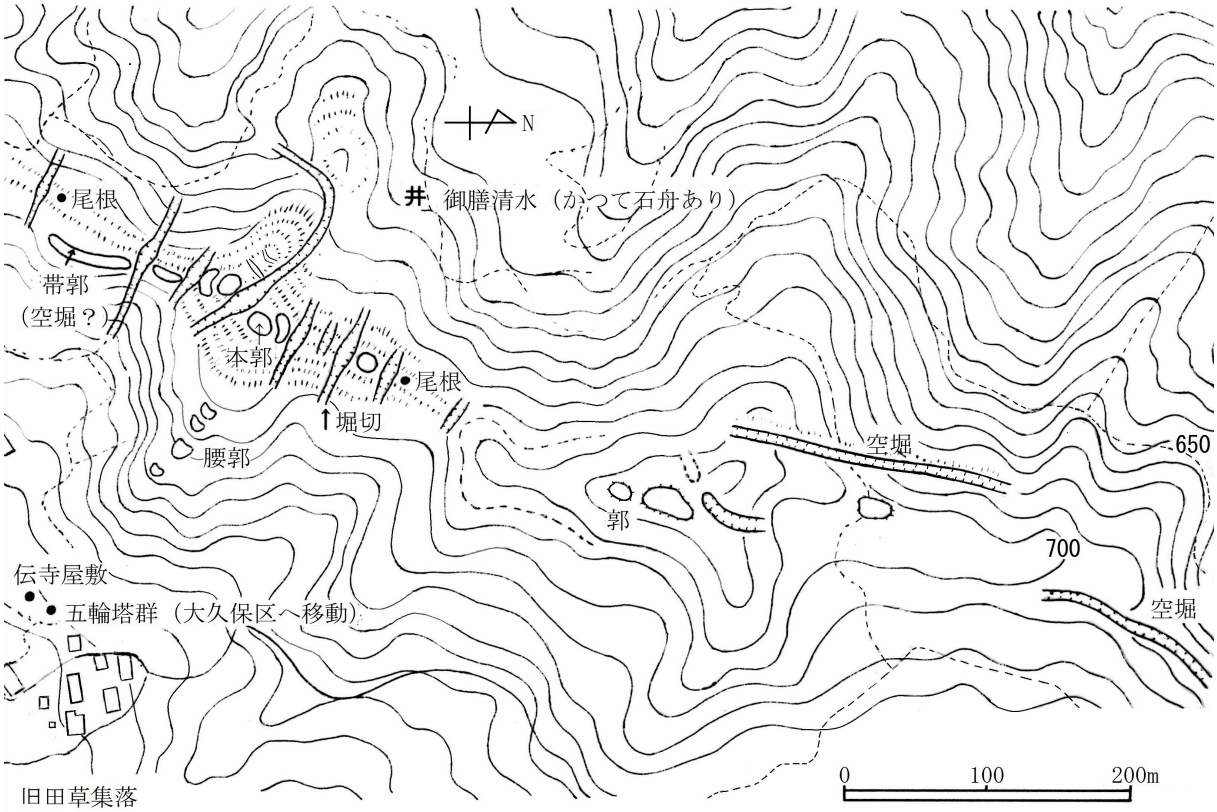
坪根城は筆者が、日本城郭体系（注１３）に略図を掲げたが、近時、山頂部分が樹木伐採の必要により、削平されてしまったことは遺憾である。したがって現状の姿は本来のものではない。当時の記憶では当城は未完成の城のように思えたが、現存する東の中腹部分の広大な削平地から、大規模な城郭を意図したものと思われる。元禄８年静間村絵図・寛政 10 年以降の静間村絵図に坪根城山と記載されている。元禄８年静間村絵図では静間村の内、寛政 10 年以降では山頂部分は奈良沢村の内となっている。なお、坪根には後谷城のお局さんが居たとするのは地元の伝承の域を出ない。本来

は周りを谷に囲まれた地形から出た名称であろう。

田草城・小田草城は飯山市秋津地区の田草川谷の東西にある。両城は飯山と狭義の善光寺平を結ぶ交通の要衝であり、また、斑尾山東麓を辿って越後に抜ける街道をおさえる位置にもあたる。

第 9 図　田草城本郭（中央の杉の木の所）を西方より望む。昭和３０年代後半の撮影。

田草谷の田草集落は中世以来長く続いていた村だ。しかし、次第に平野部に住居を移すものが増え、昭和４０年代に高度成長経済の影響を受け、平地への移住が加速され、集落は廃村同様になっ



第 10 図　田草城略図

た。田草の人達がいつも誇りとしていたのは、宝蔵の谷を背負って聳え立つ田草城のことだった。また、村の東方入り口をふさぐように支城の小田草城がある。

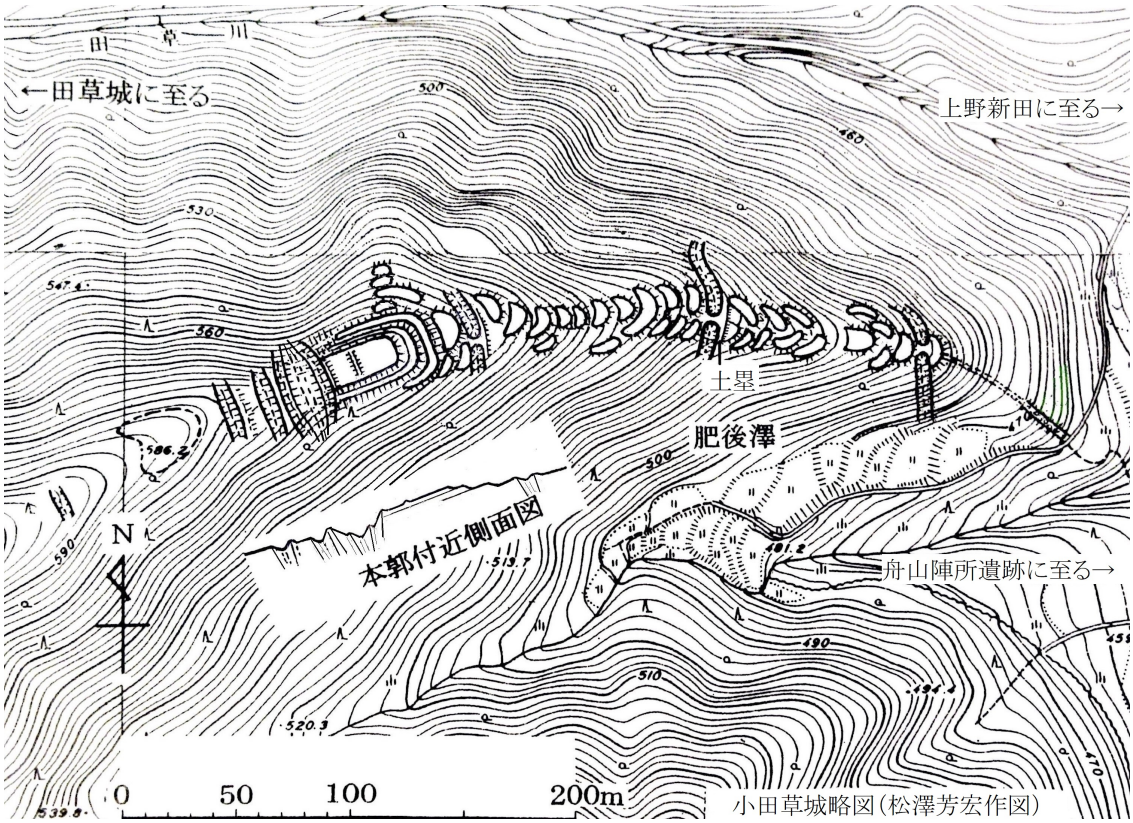
田草城は主要部分が全長約４００ｍで、北方の横空堀地帯を含めると、全長約８００ｍにもなり、

屏風が切り立ったような尾根をたくみに利用した山城である。標高約 700m、田草集落との比高差は約 100m 前後だが、西側の宝蔵谷はかなり深く、谷口との比高差は約 200m 前後ある。

坪根貢一氏所蔵江戸時代後期の絵図に、田草城主望月伊豆、小田草城主望月肥後とあるのを江口善次先生が秋津村誌編纂時に発見した。

江口先生は後世の好事家が書いたものかもしれないとしたが、静間区所蔵元禄８年（（１６９５）の静間村絵図に、小田草城主望月肥後守や肥後澤の記述があるのに気付き、江戸時代の伝承として存在したものと確信した（注 14）。

ちなみに坪根貢一氏旧蔵（現秀一氏所蔵）の静間村絵図については、天明４年（１７８４）の袋に入っていたため、そのころの絵図と以前記述したが、同図の現静間神社敷地の諏訪宮・神明宮の存在により**元禄８年～明和６年の作成である。**静間諏訪社は江戸初期にはあるが元禄８年まで一時社殿がとだえていたらしく、元禄８年に現静間神社敷地（静間館跡）に再興して、明和６年（１７６９）に東方（下方）の大正１３年までの、村社諏訪社の敷地に社地替えをした（飯笠山神社の古文書）。



第 11 図　小田草城略図　松澤平成 19 年論文の図を修正。

なお、田草・小田草城主は史実として確認できるものはなく、ただ望月某が伝承されていただけのものだと思われる。だが、ここで思い出されるのは栗岩英治氏が「観心寺を中心の金剛山一帯の城郭環を縮めた観に於いて、吉野朝あたりの一つの根拠地を聯想せしめ来るものがある。市河文書に志妻郷に宮方関係の香りを漂わせて居る一通がある。或ひは其の時代の遺跡ではあるまいか」としていることである（注 15）。

望月氏伝承は、栗岩英治氏が生きていれば、小躍りして喜んだに違いない。田草城・小田草城と

も後代の修築があるけれども、今日の城郭発掘調査の成果から見ると、南北朝時代前半の山城である熊本県の山田城に似た構造をなし、南北朝時代前後の築城と、考えられないこともない。栗岩説は一層強まったのかもしれない。

しかし、静間には立派な館が二つもあり、とんば城・坪根城・後谷城・田草城・小田草城などがこれらの館のある時期の詰の城となっていた可能性は大であり、南北朝期～室町時代初期に志津間の地頭職は小笠原但馬守であったから、小笠原氏の関係も考慮すべきと思う。

小笠原氏は信濃守護の系統であり、このころ北朝方であることから、南朝方の勢力が強い越後からの街道筋の若槻新庄静妻郷に、同族の一派を派遣していたとみるべきであろう。だが、その後南朝方が占領していたことはありうることであるが、確証はない。

また、かつて田草の通称寺屋敷地籍にあった五輪塔が、現在大久保区の勘介山山麓の墓地に移転されており、その様式が、鎌倉後期～戦国期に当たり、しかも天文７年（１５３８）の阿弥陀如来画像がもと田草村に在り、『高梨文書』天文２１年１２月１９日付けの「在京百日の夫（ぶ）」（案文書）によれば、志妻・蓮とも高梨領であつたことが知れる。よって、田草城・小田草城の室町後期

第 12 図　小田草城を北方より望む。昭和 40 年代の撮影。

の高梨氏の利用も考えられよう。

高梨政頼は弘治２年（１５５６）中野を退去し、飯山口の守りにつき長尾景虎（上杉謙信）方に**御用所として現飯山城域のうちの外郭を利用する案を提出している。**これが、越後方の善光寺平への中継基地としての飯山城の成立を示す**（注 16）**。

高梨氏はいきなり泉氏の飯山館城（やかたじろ）に入らず、田草谷に占拠していたこともあり得よう。下っては、戦国末期、田草・小田草城においては上杉・武田両軍の争奪戦があったものとも推定される。

田草城の特徴としては、本郭（ほんぐるわ）は小さいが切岸（きりぎし）が伴わず、古式の様相を見せることが第一に挙げられる。堀切の末端が長く延びていることは南北朝期前半に認められ**（注 17）**、戦国期にも多用された様式だ。

しかし、城南端の田草谷に面した帯郭は、あるいは横空堀の埋まったものかも知れず、城北端の横空堀の存在を替佐城や山口城の類似性から甲越合戦時代の使用を考える説（中学校時代当時で、恩師、教頭先生の石澤三郎先生）もある。これは妥当かもしれないが、一概に横空堀を新しいと見る意見には慎重でありたい。発掘調査の事例は少ないのである。

ただ、城の北端の宝蔵（ふるくは法蔵と記す）谷に長々と掘られた２本の横空堀は驚くべきことであり、新しいと思う人は多いかもしれない。いずれにしても、やや長期にわたる田草城の使用を考えるべきかもしれない。甲越合戦時代の使用も充分あり得よう。あるいは望月氏の伝承は甲越合戦時代の飯山城攻撃の武田勢にちなむものかもしれないし、そういう意見が多数あることも事実だが、史実としては明らかではない。

第 13 図　小田草城本郭西方の大堀切

静間の平地に近い小田草城は田草谷に向かう道を防御するような形で築かれているともいえる。小田草（こだくさ）城の所在の小字は小田草・棚・宮ノ入・荒船にわたる地域である。全長４５０ｍにわたる田草川沿いの急峻な尾根地形を利用し、たくさんの段々になった郭（くるわ）、つまり段郭や、多数の堀切をもつ巨大な山城である。

第 14 図　小田草城本郭（写真中央）と西側の中核土塁を伴う大堀切

本郭（ほんぐるわ＝後世の本丸）は標高約５７０ｍ、山麓からの比高差約１２０ｍのところにあり、広さ１５×３５ｍ前後で土塁（石が多く石塁ともみられる）や段郭を伴う。

大手は東の里に向かう方向にあり、堀切３か所には土橋があり、城門が置かれた場所であろう。堀切３か所の間は膨大な数の郭が連なる。

そして、本郭の背後の２段に掘られた堀切は、中核土塁を伴った形状をなし、幅約２１ｍ深さ約８ｍの大堀切であり、さらに連続して二つの堀切がある。ついで、背面抑えの広い郭があり、小さな堀切を経て、城外へとなる。

中核土塁は一般的な高土塁とは異なり、現状では小土塁が風化したものと思われ、土塁上に柵や

杭を並べれば防御性が高い。

本郭背後の入念な構えは戦国期的様相があるものの、城域の全体は切岸（きりぎし）が伴わず、古い様相を見せ、この城は、南北朝期前後から使用された可能性がある。

第 15 図　八つ頭（やつがしら）地籍の空堀　昭和 30 年代後半撮影。田草の人たちが陣城山と言っていた場所で、小田草城の峯を上り詰めた位置に、広い郭 2 か所と空堀と土橋がある。

また、小田草城は、その名称から、田草城の支城であったことが想像できる。

静間区蔵の元禄８年（１６９５）静間村絵図には、小田草城主望月肥後守の名称が見え、小田草城の南の谷に肥後澤の地名がある。望月氏がいたのは南北朝時代か戦国期の甲越合戦時代か分からない。

田草城・小田草城はその名前から本城と支城の関係が推定され、江戸時代後期の絵図（坪根秀一氏蔵）には、田草城主望月伊豆・小田草城主望月肥後の名前が見える。かつて、栗岩英治氏は田草の谷を囲う頑強な城の存在に注目し、南北朝時代の宮方の拠点であるかもしれないと述べ、室町時代初期、応永年代の芋川動乱にも関係する史跡でなかろうかとも言っている（注 18）。

第 16 図　松澤芳宏作「古城に雨上がる」２０１３年完成　Ｆ５０号キャンバス　油彩・水性溶剤・岩絵具。時代を江戸時代に設定した心象風景で、谷水田の開発と、田草城をイメージ。左上が田草村。

時代を遡って、望月氏も建武２年（１３３５）の中先代の乱で望月城が落城し、一族はその後南朝方についた可能性があり、南北朝末期前後に北朝方小笠原氏領の若槻新庄静妻郷の田草谷周辺を占拠した可能性が残されたわけであり、関東圏出身の新田武蔵守某が、背後に関与していた可能性は大である。今後望月氏の田草・小田草城占拠の根本史料の発見が待たれるところである。

時代は進み、戦国期の天文２１年（１５５２）ごろになると、志妻・蓮とも高梨氏の領地となっ

ているから、田草城・小田草城とも、高梨氏の要害（山城）となっていたことは確実であろう。

その後、甲越合戦の弘治３年（１５５７）８月の上野原の戦が、小田草城目前の舟山陣所遺跡を含む田草川扇状地で行われた可能性が最近の史料確認により、判明しつつある（**注 19**）。田草城や小田草城が、越後方飯山城の前線として重きを成し、武田信玄の言う亀蔵城（上蔵城＝飯山口の守備隊長の上倉氏の名前で代表させたと考えられている）の最大拠点となっていた可能性もある。

また、永禄１１年（１５６８）、静間や蓮は武田信玄が飯山城を攻める際の、前線となっていたが、武田勢の中に望月氏がいたのか、これら城を利用したかどうかは明らかではない。

時代は前後するが、天文７年（１５３８）、 田草には浄土真宗の道場があり、 天文２１年ごろは志妻・蓮とも高梨氏の領地となっていた。田草には鎌倉後期ないし南北朝期～室町期の五輪塔が多数存在しており（大久保の勘介山々麓の墓地に移動）、室町時代（戦国期を含む）高梨氏の要害である田草城などの城番に当たる人達の住家があったものと推定される。

小田草城の城番は南方の谷か、その出口辺りに住んでいたかもしれないし、田草川対岸の江戸時代にいう上野新田の場所に城番が住んでいたのかもしれない。

さて、山城には水の手が必要であるが、『元禄８年の静間村絵図』には、「宮入堤より小田草城用水堰跡」とあり、実際に宮入堤と用水堰跡が描かれている。現在は長年の谷の浸食により、その跡が探れないのが残念である。しかし、宮入堤自体は現存している。なお、肥後澤のあたりは最近まで天水田であり、掘れば水源が求められる場所である。

３、まとめ

以上、これまで述べてきたように、望月氏については、南北朝時代前後の時期か、戦国時代末期の甲越合戦時代前後に関係するものか厳密には定かではない。

確実なところ、甲越合戦時代は静間や蓮は高梨氏の領地であることが解っているから、田草城・小田草城はその頃、高梨氏の山城となっていたことは間違いない。望月氏は高梨氏の配下か、武田氏の配下か、それより以前、南北朝時代前後に関係する氏人か、はたまた後世のでっち上げか、本当に謎である。大方の解明が待たれるところである。

本稿冒頭に掲げた『市河文書』「元中十四年新田武蔵守某軍勢催促状」は南北朝合一後の地方の混乱を示す重要な文化財である。とりわけ、その書状の内容が、当地の飯山市静間に関するものである事に興味が尽きない。**田草・小田草城とも築城年代に関しては、南北朝時代前後の時期が推定されることは、述べてきた。**

田草の**宮ノ入**（みやのいり）の地名や、隣地の蓮村の**南善寺**地名から類推し、望月氏が南朝方の一拠点として一貴人の保護にあたっていたとすれば話は解決に向かうが、そうは行かないのが歴史研究である。今後の根本史料の発見を待つのみである。

但し、今回、元中十四年書状の発給主が**新田武蔵守某**であることが、他県の研究者により解明されたことの意義は大きい。本稿は新田義貞嫡流の新田武蔵守某の北信への関わりにより、2 年後の大内義弘の乱の際の、高井郡烏帽子形城占拠軍勢を越後新田氏一族と中野中務少輔の連合軍であることを推定したものである。就中、湯山庄内（野沢温泉村内）を持つ中野氏の存在が注目される。

なお、元中十四年書状の理解には飯山市静間存在の城郭群の研究が鍵を持つ、特に田草谷をめぐる三つの城郭の存在は、静間地域でも特別な地域として把握されよう。広く皆様にご検討をいただきたく、本稿に資料を提供させていただいた次第である。

注

注１　江田郁夫「新田武蔵守某について」『栃木県立博物館紀要・人文 31・1-10』2014 年。

注２　宮澤崇士「本間美術館所蔵市河文書元中十四年文書をめぐる研究史概略」（本号掲載）。

注３　『茨城県史料』・『榛名町誌』によると、元中 14 年軍勢催促状の発給者を**新田某**とし、他に同様の花押のある書状、応永 8 年・応永 33 年を掲げ、発給者を同じく新田某とし、いずれも茨城県・栃木県方面に関する宛名を有している。（注２を参照）。

注４　久保田順一『新田三兄弟と南朝』戎光祥出版発行　２０１５。

注５　花岡康孝「鎌倉府と駿河・信濃・越後」黒田基樹編著　関東足利氏の歴史第 3 巻『足利満兼とその時代』所収、戎光祥出版発行、２０１５で、末柄豊　国立公文書館所蔵「寺門事条々聞書」等の紹介。

注６　飯山市誌歴史編（上）飯山市・飯山市誌編纂委員会刊行、平成 5 年。

注７　石澤三郎「 信越国境に於ける暦応の戦と烏帽子形戦の史香（上・下）」『第 1 次信濃第 4 巻 9 号・10 号』　昭和 10 年。日本歴史地名体系第 20 巻『長野県の地名』で、同氏の烏帽子城の解説、平凡社発行１９７９年。

注８　『ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典』今川了俊の解説等、多くの辞典類を参考。

注９　『栄村史堺編』下水内郡栄村史堺編々集委員会・栄村役場刊行　昭和３９年（１９６４）。

注 10　松澤芳宏「飯山市静間の二つの館跡」高井４０号　昭和５２年。

注 11　詳細は『定本・北信濃の城』郷土出版社発行１９９６年刊行の松澤担当の「とんば城」参照。

注 12　『斑尾山東山麓の歴史と文化』飯山市ふるさと館、令和３年度秋季企画展冊子に写真が掲載されている。また、（注 6）の 296 頁に同様の写真の掲載がある。

注 13　『日本城郭体系第 8 巻　長野・山梨』新人物往来社発行、昭和 55 年で分担執筆。

注 14　松澤芳宏「水内郡賤間郷田草村をめぐる古城址とその史的背景」『長野 110 号』昭和 58 年。

注 15 栗岩英治『下水内郡史料写真帖』昭和 15 年

注 16 松澤芳宏「上野原の戦い、飯山市静間説の新展開（上）（下）『信濃』６１の９・１０号、松澤芳宏「直江實綱書状からみる長尾宗心出奔の事情　―高梨氏飯山口応援依頼の越後方返答から―」、雑誌『信濃』63 の 9 号、平成 23 年で、弘治 3 年 7 月 3 日とする直江實綱書状を弘治 2 年とし、「御用所」の文言が注目される。但し、「そちらの御用所」と訳したのは誤りで、「こちらの御用所」つまり、越後方の御用所が正しい。「**こちらに相応しい御用所**（陣所か＝飯山城か〈２０１４・１０・１９更新〉）の旨を伝えてこられているので」とホームページ『上杉謙信出奔に関する直江實綱書状の新解釈』で訂正した。

注 17 熊本県文化財調査報告　第 102 集『山田城跡』熊本県教育委員会　１９８９。

注 18 栗岩英治「新年洗筆」『第 2 次信濃』１８の１、１９４３。

注 19 松澤芳宏「上野原の戦い、飯山市静間上野説を唱える訳　ー**長野市岩野での天文二十二年説の検証**ー」雑誌『高井 220 号』２０２２年 8 月刊行、その他雑誌『信濃』等掲載の論文。

本稿はホームページ『松澤芳宏の古代中世史と郷土史』掲載の「田草城」（平成２２年８・２２更新）、「小田草城」（２０１０・８・２２更新）を改編し再考したものである。

（まつざわ・よしひろ　飯山市在住）